令和３年度第２回北海道立帯広美術館協議会議事録

１　日　　時　令和４年（2022 年）３月４日（金）　13 時 30 分から 16 時 00 まで

２　会　　場　北海道立帯広美術館　講堂

３　出席委員　吉田真弓（会長）、能戸貴英、石崎庸之、後藤眞美子、原田純子、橋本雄大、柳田祐子、持田誠、大河原茂美、中村博明　　計 10 名（欠席　加賀学、土井裕子）

４　事 務 局　　野﨑弘幸（館長）、石黒千栄子（副館長）、福地大輔（学芸課長）、早坂隆広（総務課主査）、砂子澤まりあ（総務課主事）、薗部容子（主任学芸員）

５　傍 聴 者　なし

６　議事

（１）令和３年度事業の実施状況について

（２）令和３年度美術館評価（暫定版）について

（３）令和４年度事業の運営計画について

（４）遠隔システムを利用した教育普及事業について

（５）協議・意見交換

７　協議・意見交換議事録

最初に欠席委員からの意見等を紹介し、事務局から回答

委　員：道教委としてオンライン化を進めているようなので、帯広商工会議所で実施した事業を紹介したい。

昨年 10 月に「みんな大好き！給食のおいしいパンができるまで」というテーマで帯広市内の適応指導教室に通う小学校３、４年生を対象にオンライン配信を行った。

１回目は小麦の収穫から小麦粉ができるまでを紹介、２回目にパン工場から作業風景や機械装置を動画配信した。

帯広市内 10 数校、約 40 クラス、1,500 名の生徒に興味を持って見てもらったと思う。ターゲットの小学校３、４年生の１時間の授業時間に合わせて作成した。

情報発信の方法について、メール配信は有効だが数多い他のメールに埋もれてしまう。アナログだがファクシミリ送信は有効で反応がある。

委　員：11 月 14 日に開催された帯広交響楽団による美術館コンサートを聞いた。人数制限を行っていたが、その時間、その場所に居合わせた来場者全員が聞くことができたらもっと感動を呼べたと思う。

「帯広美術館応援大使」というようなものを作ってはどうか。ほかにはないような立場の

ボランティアが生まれて、情報提供などを手伝ってもらえるのではないか。
開館 30 周年記念美術講演会を聴講した。この場に来ないと聞けない話はおもしろい。アーティストトークも同様である。
水木しげる展では長蛇の列ができていた。今後も期待する。
施設の老朽化について、保険などを活用して定期的に修繕していくことはできないか。

事務局：「美術館応援大使」というような発想は今までなかった。十勝管内、地域だけではなく北海道を越えて連携できればおもしろいと思う。検討したい。
施設の修繕については、活用できる制度を確認する。
これからはデジタル技術を活用し、コンサートなどで人数制限を設けなければならないものを中心に配信していくことを検討する。

委　員：コロナ禍は当初、芸術文化活動は不要不急と見なされ美術館も休館を余儀なくされたが、芸術文化がいかに大切か、美術館は大きな役割を担っている施設だと感じたい方が多くいたのではないか。
電子チケットを導入する予定があるのか。今後、コロナ感染が更に拡大し入場制限をするような場合、時間を区切っての制限がしやすくなる。また、来館者の居住地、性別、年代などアンケートの代わりになるので、集計も容易になる。
第１回協議会で高校生のボランティア、来館者が少ないという話題があった。帯広美術館ボランティア「しらかばの会」では具体的にどのような活動をしているのか。

事務局：公的施設でのキャッシュレス決済の導入が始まったばかりである。電子チケットの導入はまだ先である。日時指定券は近代美術館の実行委員会展で一昨年導入したことがある。密を避けることが目的だったが、効果がありすぎて来館者が激減した。手続きも煩雑であり、導入を取りやめる傾向にある。密の回避のためには、入館者の定員を定め、越えた場合は待機してもらう方法をとることが多い。
来年度開催予定である「銀の匙」展は、道立高校の生徒がモデルとなっている漫画展である。当該展覧会で高校生にボランティアとして活躍できる場を設けられないか考えているところ。

委　員：しらかばの会では、現在、高校生１名がライブラリー部で活動している。高校生の入会希望はありがたいが、学校の許可手続き等があるため、募集に力を入れていない。もし希望があれば、所定の手続きを踏んで活動してもらう。
数年前から高校生の美術館利用が少ないという話が出ている。しらかばの会では、平成 14 年から小中学生の無料招待事業、令和２年から高校生の無料招待事業を実施している。高校生もよく招待事業を利用してくれている実感がある。全ての催しに高校生を招待したいが金銭的に難しい。

委　員：しらかばの会の活動について報告する。約 200 人在籍しており、ショップ、ティーラウンジ、ライブラリーなどで活動している。協議会委員として発言できる立場になり、お客さ

んがどのように感じているのか、どのような印象を持っているのか考えながら活動させてもらっている。どのようにしたらお客さんが喜んでくれるのか、社会貢献できるのかを視点に応援させてもらっている。

委　員：高校生がしらかばの会の中で活動するのは難しいと感じた。図書館では、読み聞かせなど高校生が自主的に活動できる機会がある。美術館もワークショップなどの開催時に高校生が企画や運営の手伝いをすることもできるのではないか。高校生が主体的に美術館の応援団としてボランティアに参加くれるようになればと思う。

事務局：しらかばの会での活動とは別に、美術館主体の事業や特別展の関連事業を行う場合に、高校生に活動してもらうのは可能である。銀の匙展では、高校生に活躍してもらう場を作ることを検討している。

委　員：浦幌町には高校がないため、中学校を卒業すると帯広市内に下宿をしたり、池田町や幕別町に JR で通学したりし、一人で美術館に立ち寄る機会ができる。
僻地にとっては、オンラインアート教室は意義があるが、一方で実物を見る感動には代えがたい。手島圭三郎展で絵の前に立ち涙を流している女性おり、美術館の存在は意義があると思った。実物に近づく機会を増やすことを考えていかなければならない。
美術館評価は内部評価する場合、A や E 評価は付けづらく B,C 評価になりがちである。特に定性的な評価はそうである。少しでも定量評価を増やすことを考えたらどうか。コレクションの保管状況の項目では、額装した件数などを数値化できるのではないか。所蔵品の活用は、必ずしも他館の展覧会での活用でなくてもよい。新聞や雑誌などの媒体に掲載された件数、学芸員が記事を投稿した件数、作品に対する問い合わせがあったレファレンス件数などを数値化できるのではないか。
アンケートの回収方法、回収率にその後変化があったか。

事務局：評価目標の設定に係る提案は参考になる。現在、どのような評価項目、目標を立てられるのか全道で検討中である。美術館評価改正に係る検討会議において情報共有したい。
アンケートの回収については、回収率を上げるため設置場所を変更したが効果がなかった。

委　員：オンラインアート教室事業の周知方法についてお聞きしたいのだが、道から市町村教育委員会、各学校、担当教諭へと情報が降ろされているがボトルネックがあり、本当に関心のある子どもや住民に情報が届かないこともある。オンラインアート教室は対象が学校であるが、美術館へ行けない人に直接所蔵品を題材とした講義を行う B to C 的な方法を考えていないのか。ネットを使うのであれば、学校を通さず、直接届ける方法もあるのではないか。
ところでこの帯広美術館は、せっかく公園の中にあるのだから、外で作品を見せる機会を設けられないか。建物内に入らずとも開かれた形で美術作品にふれ合えることができたらいい。

事務局：学校への周知は組織上機械的に行っている。関心の高い先生からは逆に声を上げていただいている。どのように情報を広げられるか検討していく。
市町村教育委員会、学校を通しての周知は、学校の授業で行う教育課程に位置づけられる事業の周知方法である。一般の方を対象としたものは、ホームページやSNSで発信している。
屋外に作品を設置する場合、耐久性と盗難対策の問題があるため、慎重になる施設が多い。当美術館も開館当時一時的に作品を設置していた時期がある。屋外の作品設置に積極的な作家もいるので引き続き情報収集をしていきたい。

委　員：コロナ禍で多くの事業が中止になる中、オンラインの活用は有効だと思う。オンラインアート教室に期待する。美術館に興味を持つきっかけとなり、実物を見たいと思う気持ちにつながると思うが、根室にはそのような前段の環境が整っていない。工夫しながら事業を進めてほしい。この取組については、学校等へ情報提供させていただく。
事務局：いつでもどこでも美術作品を見られるリモート・ミュージアムもホームページに掲載しているので見てほしい。実物作品を見せるという本来の美術館の趣旨も合わせて、今後の実施方法について全庁的に検討していく。

委　員：オンラインでボランティアに参加できないか。年齢、場所に関係なく自分の家からリアルタイムで参加できるボランティアを考えられないか。
屋外での作品展示に関しては、地元の人形作家とコラボして公園内にお化け屋敷をつくるなどの企画があったら、子どもが興味を持って足を運ぶのではないか。
多くの人に足を運んでもらうには、動いたり触れたりすることができるものがあればいい。サイエンスとテクノロジーのコラボができたら興味を持つ年齢層が拡がるのではないか。カーボンニュートラルに関心がある。発電について実体験できるコーナーを美術館の一角に設けられたら面白い。

委　員：暴風雨の日に来館した。数カ所から雨漏りしており、ロビーにバケツが置かれていることに驚いた。調査したが原因はわからないとのこと。もし作品を汚したらただ事ではない。道としては修繕の順番があるのだろうが、どんな方法を使ってでも作品への影響は阻止してほしい。緊急になんとかしなければと思う。
熱心な美術の先生は研修会に参加している。そのような先生からオンラインの活用を広げられるのではないか。中学校の現状として美術の時数は、1週間に1時間と限られている。その中で生徒にはいろいろなことをさせたい。時間をどうコーディネートするか先生の考え方の違いもあるが、工夫してもオンライン鑑賞等をする時間を生み出すことはなかなか難しい。
帯広市の令和4年度の計画はニューノーマルに変えてきている。美術館に来て実際に絵を見せたいが、予算がなく交通手段が確保できない。そうなるとオンラインアート教室が重要になってくる。これがニューノーマルになれば美術館の普及活動として重要なものにな

るし、子ども達も帯広美術館を知らないまま過ごすことはなくなり、来館者も増えるのではないか。

昨年、酪農家から「銀の匙」全巻の寄贈があったので、全学校の図書室に置いてある。学校に宣伝すると来館者増につながる。

事務局：授業時数など学校現場の状況は認識している。オンラインも活用方法についてもより利用しやすい方法を検討していきたい。

当館は一番新しく建てられたが、他の美術館は途中で修繕等を行っているので、建物は一番古い。展示室に雨漏りがあると作品が借りられなくなるなど重大なことと認識している。あらゆる手段を考えていきたい。